

Title	<書評>小杉泰 『イスラーム：文明と国家の形成』(学術選書), 京都大学学術出版会, 2012年, 531頁
Author(s)	清水, 和裕
Citation	イスラーム世界研究 : Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies (2012), 5(1-2): 499-505
Issue Date	2012-02
URL	https://doi.org/10.14989/161177
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

示される。その上で、バングラデシュ、パキスタンの独立後の文学史、音楽、映画、書道、絵画など多岐にわたる文化に触れられていて興味深い。

移民社会についても各地の簡単なレビューが付されている。サイバーメディアの発展も重要だが、ウルドゥー語の詩会（ムシャーイラ）のような昔ながらの催しで在外パキスタン人が一堂に会する場面も紹介されている。

もう一つ、本論の合間に閑話休題のように挟み込まれるコラムがある。これは著者の南アジア研究と現地経験による知見の宝庫である。「南アジアのムスリム社会」「パンジャーブにおけるムスリムの知識層」「南アジアのムスリムと日本」「パキスタンにおける行政と軍の二輪走行」とテーマも幅広いが、とくに評者は「パンジャーブにおける……」と「南アジアの……」が感銘深かった。

本書を読んであらためて痛感することは、ウルドゥー語、パンジャービー語、ベンガリー語など現地の言語による史料の重要性と、そのような史料にもとづく地域研究の奥深さ、おもしろさである。先に指摘したとおり、文学作品など多くのウルドゥー語史料の引用が含まれ、融通無碍なインドの社会が生き生きと立ち上がってくる。通史的な部分をさらに削って、もっと多くのウルドゥー語史料が引用されても良かったかもしれないと感じるほどである。イスラーム化以来のインド史を一気に通読すると、ここ 30 年ほどの状況はにわかに対象化される。パキスタンがいつ破綻しても不思議ではないかのように論じる一部の論者には、本書は理論と現実を見比べるよすがとなるだろう。そして初学者にとってはもちろん、インド・ムスリムを学ぶすべての人に新しい視角を与えてくれるだろう。

（井上 あえか 就実大学人文科学部）

小杉泰『イスラーム 文明と国家の形成』（学術選書）京都大学学術出版会 2012年 531頁

本書は、イスラーム研究者として著名な小杉泰の、思想家・思想史家としての側面を強く印象づける労作である。嶋田襄平の『イスラームの国家と社会』、佐藤次高の『イスラームの国家と王権』に並ぶテーマをもった著作であり、取り扱う時代、地域、主題も非常に近い。嶋田の著作は、日本の東洋学の伝統と欧米のオリエント学の成果を融合した、日本で初めての本格的なイスラーム国家形成論であり、佐藤の著作は、嶋田の著作を継承し土台とした上で、佐藤独自の豊かで広範な史料研究の成果をつぎ込んだ国家論、王権論であった。これに対して、小杉の本作は、さらにこの両作を土台とし、また海外や国内の最新の研究成果を広く吸収消化した上で、嶋田・佐藤とは大きく異なった視点すなわち思想史・文明論という立場からこれらを独自に再構築し、新たなイスラーム社会形成史を提出したものである。そこには、現代イスラーム研究の第一人者である小杉泰のイスラームに対するまなざしが大きく刻み込まれている。

それでは、本書の概要を紹介しよう。本書は、全 10 章からなっており、その章構成は以下の通りである。

はじめに

第 1 章 イスラーム圏の地理的・空間的拡大

第 2 章 文明的な展開

- 第3章 文明の形——イスラーム的特質
- 第4章 共同体と国家の形成
- 第5章 カリフ制国家の形成と変容
- 第6章 イスラーム化の進展
- 第7章 アラビア語の成長と諸科学の形成
- 第8章 イスラーム法の発展
- 第9章 イスラームの体系化
- 終章 その後のイスラーム文明と国家

本書の特徴のひとつは、「イスラーム文明」という概念に徹底的にこだわり、正面から「イスラーム文明」論を展開していることである。序文にあたる「はじめに」において著者は、本書の対象とする時期を7世紀から10世紀に設定し「イスラーム文明について、本書ではその形成期を中心に、その特質を考えていきたい (p.ix)」としている。その上で著者は、「文明」を「技術体系/テクノロジー」によって特徴付けられるもの」と定義し、さらにその技術体系とは、「科学・技術」と結びついた理系の技術体系」と「社会運営の技術体系」の両方を含むものとしている。この文明の定義は、イスラーム文明論の書である本書の根幹であり、一貫して本書を支える鍵となる概念である。

本書のもうひとつの特徴は、「遊牧文化が持つ技術体系」に注目する点である。これは主に第3章の三項連関論にあらわれるが、イスラーム文明の特質を、定住を中心とした農耕・都市の二項対立ではなくそのなかに遊牧文化が重要な要素として取り込まれたものとする。この遊牧文化の「技術体系」が、イスラーム「文明」を、他の文明とは異なった独自のものとしている、というのが著者の主張である。

本書の小杉の議論は、非常に大胆でありながら細部に慎重な気配りがされている。このため、限られた紙幅でその内容を正確に伝えることはむずかしい。以下の紹介は、あくまで評者の一面的な理解にすぎないことをお断りしたい。

さて最初の2章では、本書の前提となる事実の概説がなされている。まず第1章では、イスラーム文明の形成期に生じた、地理的空間的拡大について概括される。ここではイスラーム発祥の地であるアラビア半島を、西アジアからアフリカに広がる「乾燥オアシス地帯」の一部ととらえ、そこでムハンマドの活動がはじまり、やがて大征服の時代からウマイヤ朝、アッバース朝の帝国時代を迎えたことを大まかにまとめている。そして、「乾燥オアシス地帯」のなかで水源をもち農耕と都市を発展させた特定の地域を「文明の重心点」とよび、イスラーム文明下の「文明の重心点」の所在を概観する。ここにみられるのは、生態環境と文明形成を相互に影響し合うものとして、イスラーム文明をその文脈下にとらえようとする強い意志である。それは単なる風土論や環境決定論ではない。文明論の土台として、イスラーム文明をまず地理的・空間的拡大の結果形成されたものとしてとらえ、そのことが持つ「意味」を真剣に探る試みであると言えよう。

第2章は、地理的空間的拡大につづく、文明的展開を時系列に従って概括する。ここでは、イスラームは誕生した当初は文明ではなく、先行文明の地域を征服していく過程で文明となった、という主張がなされる。そして従来の様々な文化論と文明論を検討する中で、特に応地利明の所説を「生態系に基盤を置く、あるいはその生態系の境界の中で展開している文化が、それを超えるような性質を獲得すると文明となる (p.39)」という理解で受容し、その上で「文化には地域的な固

有性がある。この精神と技術にまたがる生活様式の体系が地域を超えて広がる時、それは文明である」とする。そして、アラビア半島の生態環境のなかで形成された遊牧文化をとりこみ、それを超えた生態系に適用可能な文明の要素として展開したのがイスラーム文明の特徴であると指摘するのである。

同時に小杉は、ここで文明について再定義を行っている。先述の通り文明を「技術体系／テクノロジー」によって特徴付けられるもの」としたうえで、「独自の文明が形成されるためには、技術や文化の諸要素を統合しうる認識論的な基盤や世界観・社会観が必要 (p. 57)」とする。そして、文明はこの「認識論的基盤」によって「理系の技術体系」と「社会運営の技術体系」を統合したものであるとされる。こういった「認識論的基盤」と「社会運営の技術体系」をイスラームが提供したのであり、これはアラビア半島に形成されたイスラーム文化に未分化ながら胚胎されていたものである。その後イスラーム文化は大征服によって先行文明と接触し、その「理系の技術体系」を自己のものとして、地域を超えた生活様式の体系を生み出してイスラーム文明となった、とされるのである。そして、これを可能としたイスラームの要素を6点に分けて検討している。

このようにこの章では、イスラームのアラビア半島における発生と「大征服」による地理的拡大が、そのまま特定の生態環境における文化形成とその生態系を超えた地域における文明化の過程として再叙述されている。いわば、第1章と第2章は、同じ現象を地理的観点と文明論的観点という2つの観点から眺め比べたものであるということができる。そこにあるのは、嶋田や佐藤の描いた歴史学的歴史を、もしくは小杉自身が『イスラーム帝国のジハード』で描いた思想史的歴史を、生態環境論と文明論を武器として、再度、腑分けしてみせたものである。

第3章は、イスラーム文明が遊牧文化を融合したことの意味に正面から取り組んでいる。冒頭にも述べたように、著者は、従来の定住文明では遊牧技術が軽視され、遊牧文化が野蛮視されている点に警鐘を鳴らし、遊牧文化とその技術の豊かさを指摘する。そして従来の文明が、定住文明と遊牧民の対立を文明と野蛮の二項対立とみなし、さらに定住文明の中に都市と農村の二項対立をみてきたとする。これに対して著者は、イスラーム文明の構図として、都市・農村・遊牧文化の三項連関を主張する。そしてイスラームの倫理や行動パターン、また聖典の言葉の中に、遊牧文化が強く反映され、これがイスラーム文明の大きな特徴となってきたとするのである。

都市・農村・遊牧を相互に連関する生活体系ととらえること自体は、すでに多くの遊牧社会研究が指摘している点である。小杉の試みは、これを文明論の枠組みの中に大きく位置づけたことにある。今後、モンゴルをはじめとする中央ユーラシアの諸文明との対比、キリスト教が本来遊牧社会を背景とした点など、比較検討すべき点は多く、刺激的な議論であるといえよう。

第4章から第6章は文明論に次ぐ国家論が展開される。

第4章では、ウンマの概念をイスラーム国家の最重要要素として位置づけ、最初期のマディーナ憲章について実証的な検討を行いつつ、イスラーム国家の政教一元論を検討している。まず著者は、イスラーム以前の部族社会からイスラームが生まれ共同体を形成する過程を概観したのち、過去の自らのマディーナ憲章研究に最新の研究動向を加えた上で、その内容を逐次検討する。この部分は本書の中でも異彩を放っており、初期イスラーム史研究者には特に読み応えのある部分となっている。ここでは、他の宗教をイスラーム共同体にいかにか統合するかという問題が、マディーナ憲章とその研究のなかで大きなテーマとなっていることが理解できる。すなわち、ウンマの概念は下位の集団意識を許容することから、イスラーム共同体であるウンマとは最終的には「ウンマ=エスニシティー複合体」へと向かうことがここで提示されるのである。

このようなマディーナ憲章の検討から、著者は「神権統治」と「政教分離」概念、そして「政教一元論」の検討に踏み込んでいく。すなわち、教会と国家が宗教と政治に分離している「政教分離」もしくは「政教一致」の西欧的あり方に対して、イスラームでは宗教と政治がもともと分化しておらず共同体と統治権が同時に発生した「政教一元」である (pp. 153-154)。そしてイスラーム国家はイスラーム共同体から「親子」として生じるために、共同体と国家が宗教と政治に分離することはなく、「親」である共同体においても、その「子」である国家においても政治と宗教は一元的なものとして認識されるのである。しかし、これは「神権政治」ではない。ムハンマドの時代は神の啓示による「神権政治」が行われたが、その後のウンマの代表者は預言者機能を持つことなく宗教者でもない。イスラーム国家においては、「神権政治」によらない「政教一元」の国家が成立したとするのが、著者の主張であり、この主張は第8章と大きく関わっていく。

第5章では、神権政治終焉後にあらわれたカリフ制国家のあり方が検討される。ムハンマドの後継者となったアブー・バクルは、その統治権・軍事権・徴税権を継承し、同時にムハンマドの近親者の特権を否定した。このふたつによってアブー・バクルは神権政治から断絶したイスラーム国家を樹立したのである。このカリフ政体はイスラーム的な正統性の確保を重視した政体であり、カリフは、ウンマと国家の両面において代表者・指導者とみなされた (p. 169)。しかし、この政体は内乱によるウマイヤ朝成立によって、ウンマと国家 (王朝・ダウラ) が分岐することによって大きな変質を迎えた。この分岐は、ウンマの指導権を主張する反体制派の出現と、宗教や知の面においてウンマを代表する知的エリートのなかにウマイヤ朝の実態を批判するものが多くいたことの2つの面で生じた (p. 194)。このウンマとダウラの乖離がアッバース朝革命としてあらわれたのである。

第6章では、ウマイヤ朝からアッバース朝へとイスラーム国家と社会が発展する過程を、イスラーム化のプロセスとともに論じている。まず著者は、アラブ帝国とされるウマイヤ朝について「ウマイヤ朝に存在意義を与え支配を正当化していたのは、平等原理を含めてイスラームを広めるというウンマの存在目的であろう (p. 202)」とする。すなわちウンマと国家の二重性のなかで、ウマイヤ朝は国家としてはアラブの支配する王朝権力であったが、同時にそれは共同体としてのウンマを維持・拡大し、イスラームそのものを広める機能を果たしていたという主張である。そしてウマイヤ朝が果たした貢献として、統治制度の整備を挙げている。このようにウマイヤ朝のイスラーム国家としての意義を積極的に評価する点は、過去の日本におけるイスラーム史研究ではあまりみられなかったことであり、近年のウマイヤ朝に対する再評価の流れを受けているものといえよう。

次に、この章のもっとも中心的なテーマはイスラーム化とは「何か」を検討することである。著者は、ウマイヤ朝の統治制度形成についても、先行する古代帝国の制度を継承しつつイスラーム化する作業であったと評価している。その上で著者は、イスラーム化をイスラームの「現地化」と表現し、「イスラーム化とは、対象地域がイスラーム色を強めると同時に、その地域でのイスラームが当該地域の歴史や文化の影響を受ける「双方向的」で「双補的」なプロセスであり、イスラーム化と現地化が同時に起きる過程 (p. 219)」であるとする。そして「イスラーム文明は、先行文明の諸地域をイスラーム化するとともに、イスラームにこれらの先行文明を取り込むことによって成立した」とするのである。この議論については、評者は全面的に同意見である。イスラーム化の過程とは、イスラームという認識枠組みが現地の事象をくむと同時に現地のあらゆる現象がイスラームの言葉で語られる過程であるというのが評者の意見である。小杉の議論は、まさしくその現象を「双方向性」と「現地化」という言葉で言い表している。

そして、このイスラーム化の現象の中でアッバース朝が成立する。小杉は「アッバース朝は、イ

スラーム的原理を正当性の基盤に据えた上で、イラン的な王権の伝統なども取り込んだダウラ（王朝権力）を作った（p.226）」とし、この時期にイスラームの内実が形成され、その広大な版図の中で「アッバース朝の治下で、論争や合意や対立が生じ、競合が行われ、統合と拡散が生まれるアリーナが生まれた（p.229）」ことの意義を強調している。そのようなアリーナのもとに、未分化なイスラームが「分節化・精緻化・体系化され」イスラーム文明が独自の文明となるに至ったとされるのである。この、アッバース朝の支配下で議論のアリーナが形成されたという小杉の指摘は非常に重要である。アッバース朝下においてイスラームが成熟したことについては、単にアッバース朝がイスラームを支配原理としたということだけではなく、その広大な版図のなかで、多くの知識人や政治家が移動し意見を交換し、また対立したという事実が必要であったという点は、まさしくその通りであろう。思想史という視点から歴史をみる、小杉らしい鋭い着眼点であるように思う。

第7章は、このようにイスラーム思想・イスラーム信仰のアリーナとして成立したアッバース朝において、宗教と文明の面で決定的重要性をもったアラビア語の意味と、それを媒介としたイスラーム諸科学についての検討がなされる。文明を「技術体系」との関わりで検討する本書にとって、第7章が「理系的な技術体系」を論じ、第8章が「社会運営の技術体系」としてのイスラーム法を論じた部分となっている。本章では、いわゆるアラビア語による先行文明の著作の翻訳問題をも扱い、これらイスラーム科学の成立について、「イスラームの根本的な原理と社会運営のための技術体系が、先行する科学とテクノロジーと出会い、イスラーム自体の文明化とともに先行文明のイスラーム化が生じる過程（p.273）」と表現している。アラビア半島の生態環境に生まれたイスラーム文化が、その地域的拡大とともに、新たな技術を自己のものとして、イスラーム文明を形成するという著者の主張がぶれずに全編を貫いているのである。

ここで、一点のみ残念なミスが付図に存在する。本文253頁にあるように、バグダードのワッダーフ地区はバスラ門を出てすぐの新橋を渡ったところにあったとされている。しかし、254頁のイメージ図では、クーファ門からの橋を渡ったところにずれており、正確でない。正しくは3センチほどずれた場所を指定するべきであろう。念のためこの場を借りて指摘しておきたい。

第8章は、イスラーム法と法学派の形成を論じている。著者は、「社会運営の技術体系」が「法」として具体的な形をとることがイスラーム文明の特徴であるとする。そしてそのイスラーム法は法学者の解釈によって内容が形成されるため、そのような解釈の蓄積するなかで法学派が生まれたとする（p.292）。そして、法学派形成の過程をたどるなかで、法学者が王朝と緊張関係をもっていたこと、すなわち「彼らは国家との関係で言えば「私人」であったが、イスラーム法が「ウンマの法」であるという観点から言えば、法学者もカリフも「預言者の後継者」（p.301）」であったとし、このようなイスラーム法をめぐる「解釈の営為」が地方分権的に行われたため、イスラームの法制は中央集権的ではなかったと指摘する。さらに法学の発展とともにハディースが重視されるようになったこととの関連で、著者は、内乱で敗北して政治から身を引いたアーイシャとその弟子ウルワ・イブン・ズバイルそして「原スンナ派」へ至る学統に注目する。彼らは「ウマイヤ朝において預言者伝承を語ることによって、静かに「分裂前のウンマ」を再構築しようとする人々であった（p.331）」とされるのである。そして、この原スンナ派の流れで、アブー・ユースフは「法学者と君主の関係を「法の解釈者」と「法の執行者」として連携するもの（p.346）」として表現し、ミフナの失敗によってこのカリフに対する「ウラマーの優位」が明らかとなる。

ここで小杉が明らかにした、アーイシャからアブー・ユースフ、そしてミフナの失敗に至るスンナ派ウラマーの地位の確定の過程は、非常に重要な議論である。アーイシャとウルワの存在を指摘

することによって具体的に第一次内乱における有力教友の敗北から最終的なスンナ派ウラマーの勝利に至るまでを、説得力をもって跡づけた著者に敬意を表したい。

第9章はイスラームの体系化についてであるが、その中心は分派の形成と、それに対応するスンナ派の自己形成の過程を追うことにある。すなわち、イスラーム文明形成の過程であらわれた危機は、イスラーム文明が様々な面で分裂を回避し、統合をもって発展しうるかという点にかかっていた。ハワーリジュ派と、特にシア派の活動はそのような分裂の危機をもたらすものであったが、まさにその時期に「沈黙の大多数」はやがて「スンナとジャマアの民」を呼称しつつ「静かな革命」を成し遂げ、主導権を取り戻すことになる。それらの人々は「幸福な時代」の集団的記憶を継承し、分裂を嫌い、ウンマの平安を望む (p.384) ウラマーを主体とした人々であり、最終的には王朝のミフナに対抗することによって勝利をおさめることになる。かれらは法学・神学・ハディース学を通じてウンマの合意を達成し、ウンマを代表する多数派としての「ジャマア」を形成するのである。さらに著者は、このようなウラマーたちの学派やネットワーク形成による合意の形成メカニズムを、「思想史上のメカニズム」とよびウンマを思想の市場とみなして、イスラーム科学の形成をもそのような思想市場の運動として位置づけている。

終章は、ここまで論じてきた小杉独自の文明論・国家論によりながら、その後の歴史の流れを概観している。そして最後に、人類史におけるイスラーム文明の意義と、今後の「文明の再生」の可能性を論じているのである。

以上、評者の理解に従って、若干のコメントを交えつつ本書の紹介を行ってきた。大作と言うに相応しい本書には、ここにはふれることの出来なかった斬新な議論が、まだまだ多数含まれている。ここまで見てもわかるように、小杉はつねに、「新しいキーワードを創出する」ことによって自身の独創的な見解を展開させていく。これは、意図的になされた著者の、議論展開と思想伝達のための方法論とも言うことができよう。そのうちのいくつかは、これからのイスラーム研究に大きな影響を与えうるものであると考える。例えば、評者の個人的関心からいえば「スンナ派の静かな革命」という概念は、いわゆる「シア派の時代」論に対応し8世紀から10世紀にいたる思想史だけでなく、政治史・社会史にも応用可能な重要なテーゼであるだろう。

そのように極めて多くのアイデアを投入した著作でありながら、前述したように、本書は一貫して独自の文明論の見通しに従って展開し、その文明論、国家論を論じ続けている。この論理的一貫性は、例えば佐藤次高の『イスラームの国家と王権』とは大きく異なった肌触りをもっている。そのなかで、評者が僅かに残念に思ったのは、本書がイスラーム文明を主体的に担おうとした人々の営為を論じているために、イスラーム文明に結果的に包含され、否応なく、もしくは主体性を奪われながらイスラーム文明の一翼を担った人々の営為が、文明論の枠組みで論じられていない点である。具体的には、奴隷、被征服民、異教徒などがこれらに相当する。なぜこれらがイスラーム文明論の内側で語られる必要があるかと言えば、それは、彼らこそが潜在的な改宗者、解放奴隷、すなわちまさしく「文明の主体」である自由人ムスリムの母体であり、なおかつ、自由人ムスリムになる選択肢をとらなかつた、もしくは、採ることを許されなかつた人々であるからである。この自由人ムスリムと奴隷、被征服民、異教徒の垣根が非常に低く、かつ後者が厳然と存在し続けたこと。しかも彼らもまたイスラーム文明の重要な担い手であったこともまた、この文明の大きな特徴であろう。本書のような労作を前に、あえて無い物ねだりをしてみたが、このような隷属者などを含む階層性／二重構造に対する考察もまた、著者の議論を豊かにするに違いないと思う。

長々と紹介を続けてきたが、本書はイスラーム研究と関わる多くの人々に是非、手にとって戴きたい一作である。

特に、若手研究者、イスラーム社会の現代研究を志す学生や研究者は、本書にじっくりと取り組むべきである。そして現代研究、思想研究に携わる小杉が、本書を書くに至ったことの意味を、真剣に考えてみて欲しい。現代、そこにあるイスラーム社会が、なぜ・どのようにして「過去のイスラーム」を志向し、自分たちの理想とする「過去のイスラーム」を再構成しようとするのか。それを理解することが、同時に小杉が本書を執筆せずにはいられなかったことを理解することでもある。現代の事象を理解する多くのヒントが本書にはちりばめられている。それは、優れて「現代研究」の書でもある。

同時に、冒頭に述べたように、本書は、嶋田襄平、佐藤次高の主要著作と肩を並べる労作であり、初期イスラーム史をはじめとする前近代イスラーム史研究者にとっても必読の書である。歴史学の立場からは、本書はあまりに思索的でありすぎるという批判があり得るかも知れない。それは、本書が多くの先行する歴史学研究成果を取り込み、歴史学的な積み重ねを行っていることから、逆に生じる印象であろう。しかし、本書は本質的に、思想家であり思想史家である小杉泰の意欲的な思索の産物なのであって、それこそが本書の醍醐味である。これを受けて実証史家は、自らの実証的手法によって本書の主張するところと対話を積み、また相互に刺激しあうことによって、ともに、より新しい局面を切り開くことができるものと期待したいのである。

(清水 和裕 九州大学人文科学研究院)

Айдар Н. Юзеев. 2007. Философская мысль татарского народа: Основные направления развития (X – начало XX вв.). Казань: Татарское книжное изд-во. 214с.

(アイダル・N・ユゼーエフ『タタール民族の哲学思想——発展の基本的諸傾向(10～20世紀初頭)』、カザン、2007年、214頁)

ヴォルガ川の中下流域からウラル山脈南麓にかかる地域は、沿ヴォルガ・ウラル地方あるいはヴォルガ・ウラル地域といった名称で呼ばれるが、歴史的にはキプチャク系のテュルク諸語を用いるイスラーム教徒の居住地であり、およそ現在のロシア連邦タタールスタン共和国やバシコルトスタン共和国の領域にあたる。本書は、この地域のテュルク系ムスリムのもとで歴史的に展開した思想の諸潮流を、「タタール民族¹⁾の哲学²⁾思想」という枠組で包括的かつ体系的に解説しようとする学術書である。

本書の著者アイダル・ニロヴィチ・ユゼーエフは、現在タタールスタン共和国の首都である、ヴォルガ中流域の中心都市カザン出身の、タタール人アラビストである。ヴォルガ・ウラル地域のテュルク系ムスリムの思想や歴史、言語や文学を研究するタタール人やバシキール人の専門家は少なく

1) 本稿で評者は、著者が用いるロシア語の народ を「民族」、нация を「ネイション」と和訳する。народ の語は場合により「人民」と訳するのが適切であろうが、著者の用語法ではエスニックなニュアンスが強く感じられるためである。

2) 本書で著者が述べる「哲学(философия, 形容詞形 философский)」には、イスラーム哲学であるファルサファのみならず、イスラーム神学やスーフィー思想、西ヨーロッパからロシア経由でもたらされた啓蒙思想など、著者が「タタール民族の哲学思想」の構成要素だと考えるものがすべて含まれる。ちなみに著者はファルサファのことを、「哲学的思索の古代諸型へと方向づけされた知(мудрость)」(20頁)と説明する。